ひと物語

vol.101

癒しの灯りにみせられて

あんどん作家　辻本伊代一（いよかず）さん（77歳・池田二）



照明道具の行灯（あんどん）を制作して23年。四角い形をした伝統的な作品をはじめ、美しい曲線を取り入れたデザインや幻想的なシルエットが浮かぶ行灯を生み出してきました。

姉の一言をきっかけに制作

大手家電メーカーを早期退職し、54歳の時に行灯の制作を始めました。きっかけは家族と出かけた旅行でした。旅館で枕もとを照らす淡い光の行灯を姉が気に入り、「それなら作ってあげよう」と約束。知人と出かけた展示会でも多くの作品に触れて興味が膨らみました。

小学校の工作で舟や貯金箱を作るなど木工には自信がありました。輪切りにしたスギの板を台にし、骨組みに和紙を張って制作。拾い集めたモミジやイチョウの葉を内側に張り付けて陰影を映し出し、初めての作品にしては上々の出来でした。

曲線の美しさにこだわり

自宅に工房を開設して5年が過ぎた平成20年、初めて出展した岐阜県美濃市の展示会で入賞すると、その後も各地の展示会に出品。65歳の時には和歌山県湯浅町の「ゆあさ行灯アート展」で『星のゆめ』が最優秀賞に輝きました。

1か月半～2か月かけて制作し、手掛けた作品は約300点。柔らかな曲線にもこだわり、細いひのきや竹ひごをドライヤーの熱風を当てながら曲げる加工を施します。灯りの世界を演出する手すきの和紙は京都や福井の産地を回って調達。多彩な色や透かしを施した和紙も使い「手で触って質感を確かめ、持参した電球をつけてどのような色になるのかを見極めています」。

身の周りにアイデアのヒントが

身の周りにアイデアのヒントがあるといい、旅先で見つけることも度々。作品を上からのぞくと星が光って見える『星のゆめ』は、マレーシアで食べた果物の切り口が星の形をしていたことから思い付きました。



上からのぞくと星が光って見える『星のゆめ』



扇形の景観をイメージした『棚田・あらぎ島』

9年前の作品『棚田・あらぎ島』は和歌山県有田川町の川沿いにある扇形の土地に作られた棚田の景観をイメージした力作。「ほかの作品より壊れやすく、内側から支える補強用の竹の柱の陰が映らないように工夫するなど制作に3か月もかかりました」。

「手が動く限り作りたい」

これまで展示会のほか、銀行や農協のロビーで個展を開き、ステンドグラスや書道の作家仲間とコラボ展も開催。店舗などに飾るインテリアとしての制作依頼もあり、「手が動く限り多くの人に喜ばれる作品を作り、展示会でも見てもらいたい」と意欲を見せます。